

た。全国から3年を限度に先生方が集められ、日本の俸給とは別に、在勤手当(税引後手取り)として校長56万円、教頭50万円、教諭は45万~26万の8段階を、さらに住宅手当を35万程支給されている。日本での給与のざっと3倍に当るので、かなり良い生活はできる。何に使うかだが、多くは国内、外国旅行に当てているようである。

商社・大企業・在外公館勤務員となるとさらに給与は1ランク高く、主人はお抱え運転手付メルツェデス=ベンツ、御夫人はスカイライン、家事は女中まかせも多くなる。昼から夫人連のゴルフ・マージャン大会、子供の弁当は購入したものが

多く、夜は主人と連れ立ってパーティーへ。そのくせ帰国後の子供の高校進学が気になるため、年間78日も登校した御夫人もいる(校長談)。

なぜ偶然派遣されたその国を、手で触れ、肌で感じて隅々まで知ろうとしないのか。この点は誰にも引けをとらない強い点を創ろうとしないのか。冷房車のガラス越しに彼の国の実像はわからない。ある大手企業駐在員の「大使は別とすれば、この国のことを真剣に考えている大使館員はほとんどいない」は、信じたくないが真実であろう。

(筑波大学)

払い戻された特急料金

諏訪 彰

昭和57年の夏、私は、続け様に妙な経験をさせられた。8月7~27日のわずか3週間に、国鉄の特急料金を3回も払い戻されたのである。職業柄、毎年、よく旅行し、従って、予約してあった国鉄の列車や、定期的船・飛行機が不慮の事故で運休になり、キャンセルされたことは少なくない。しかし、切符が改札され、旅行が開始されたにもかかわらず、結局、特急料金が払い戻され、しかも、こんなに立て続けに繰り返されたことはなかった。

1回目は、長野県の下高井教育会等が主催した志賀高原夏季大学の講師を引き受け、8月7日14時46分上野発の特急白山5号で長野へ向かった時であった。14時すぎに、熊谷市内の高崎線無人踏切で、エンスト中の軽ライトバンに、進行してきた上下線の特急列車が相次いで衝突し、車の若い女性3人が死傷した。そのため、特急白山5号の上野出発が遅れ、途中ものろのろ運転を余儀なくされて、軽井沢以遠では、定刻より2時間以上も遅れてしまったのである。それでも、幸いに、同日夜、志賀高原にたどりつけたので、翌朝からの講義には差し支えなかった。

2回目は、諏訪市の別宅で静養するため、家族

連れで、8月14日18時新宿発の特急あずさ15号で上諏訪へ向かった時であった。発車直後に冷房装置が故障し、八王子から技術員が乗り込んできて、修理を急いだが、結局、甲府までなおらず、車内は蒸し風呂のようであった。列車の遅れは2時間未満であったが、特急料金は半額だけ払い戻された。いわば“我慢料”であった。

3回目は、8月27日、愛知県小牧市の自主防災会・婦人消防クラブ連絡協議会発足記念大会で講演しての帰途、同日16時43分名古屋発の新幹線ひかり180号(新大阪始発)に乗ろうと、同駅ホームへ出た時であった。都井岬一防府と北上した台風13号のために、新幹線のダイヤが大混乱し、ひかり180号も座席指定は取り消され、かつ、その名古屋到着は大幅に遅れるようであった。「どれでも結構ですから、乗れる列車に乗って行って下さい。東京駅で特急料金を半額払い戻します。」との駅員の指示に従って、帰京した。

なかなか得がたい、バラエティーに富んだ経験をさせてもらったわけであるが、現代の文明生活のもろさを、今更のように、痛感させられた。万事が都合よく行っている平生は、お互いに、誠に快適な生活を楽しんでいるが、ちょっとしたき

かけて、調子がすっかり乱され、しどろもどろになってしまうのである。

それにつけても、大地震来襲の場合のことを考えると、全くぞっとさせられる。あらゆる支障が続出し、テンヤワンヤになってしまうであろう。ことに、発火危険物がはん濫し、互助連帯の気持が欠乏している昨今の都市は、物心両面で地震にごく弱く、この悩みは、過密な大都市ほど深刻である。1923（大正12）年の関東大地震の際は、東京の下町は震度6で惨害を出したが、山の手は震度5で、さしたる被害は出さなかったという。しかし、現状の東京では、震度5でも、天災・人災織りまぜられて、收拾がつかなくなる恐れが多いように考えられる。

東京都区部では、江戸時代以降（西暦1603年～）に、震度6以上の所があった地震は、1923年の関東大地震などの7回だけだったが、震度5以上の所があった地震となると、37回も記録されている。つまり、破壊地震の間隔は平均約9年で、最長でも39年であったが、今回は既に50年以上になっている。一般に、地震の予知・予報はまだ不可能で

あるが、地震の反復性などからみて、いずれ将来、次の破壊地震が東京を襲うのは、いわば“当選確実”であろう。

しかも、これは、京浜地方に限られた問題ではなく、中京地方・京阪神地方など、他の大都市についても、五十歩百歩なのである。また、地震対策は、限定された地震専門家や防災関係者がきりきり舞いするだけでは、とても、見るべき成果はあげられないであろう。すべての人びとが、地震について正しく知り、正しく恐れ、そして、お互いに声をかけあいながら、正しく備えていくほかはないであろう。

私の講義は、昭和55、56年度には専攻科目の地理学特殊講義であったが、57年度からは一般教育科目の地学（地質・鉱物）となり、講義内容をかなり変え、受講学生数も激増したが、やはり、地震・火山問題を主軸にしている。ひとりでも多い人が、地震・火山活動に対する関心を深め、防災意識を高めてほしいと、念願している。

（元気象庁）

地籍図研究グループのこと

滝 沢 由美子

日本地理学会内にいくつかある研究会の一つに、東大の西川治先生が主査をなさっている地籍図研究グループがあり、現在私はその幹事を仰せつかっている。幹事といってもクラス会の幹事と同じで学会との連絡、研究例会の通知をするなど、さして大変なことは無いが、研究例会に幹事が欠席という訳にはいかず、大げさに言えば万難を排して出席しようという気構えが必要となる。主婦業を兼ねる身には、それも周囲の協力なくしては無理なことで、昨秋の例会時には北海道で開催のため4日間留守となり、主人は勿論、子供の同級生のお母様、お父様に子供達の面倒をお願いしてのやりくりであった。子供の生活をそれ程乱さずに、社会に出て活動しようとする女性にとっては、子

供をもつ親同志の協力は大切であると痛切に思う。自分の子供と同様に預かった子供に接し、子供達も親達もそれを当然として受入れ、見栄をはることもなく、理解、協力し合って付き合えるということは、自分の子育てについてのみでなく色々教えられることが多く、とても有難いことだと思っている。それに何よりも、そのような結びつきが少数であっても地域の力となり子供達に良い影響を与えると考えている。子育てが今程むづかしい時代はかつて無かったと言われているが、学校や家庭の教育力の他に、この地域の力というものの子供の教育において重要な意味をもつと考えるからである。

さて、話を元に戻して、地籍図研究グループは